

私は大阪の帝塚山で生まれ育ち十八年、そこから首都圏で十七年、帰阪して河内長野に三十数年住んでいる。しかし、未だかつて自分が関西人とか、まして大阪人と思ったことは一度も無い。父の代まで続いた阿波徳島が故郷で、四国人だと思っている。

そして徳島といえば「阿波踊り」。秋の季語になっている。十年ほど前、夏を目前にした四国三郎・吉野川の河口近くに行った。踊りの練習をする三味線や鉦、笛、小太鼓、大太鼓の「ぞめき」と呼ばれる二拍子の激しい音色が夕闇の中から聴こえてきた。その瞬間、不思議に涙が止まらなくなり、間違い無く阿波男の血が流れていると実感した。

妖しげな男踊りや阿波の国 鐵嶺

多くの人に、「[テキスト ボックス]連」の提灯を腰から掲げて踊る阿波男の艶っぽい笑顔を是非とも一度見て頂きたい。

さて、俳句界で四国人と言え、何と言っても正岡子規と高濱虚子。司馬遼太郎は『坂の上の雲』に、二人のことを次のように書いている。

〈世の人は四国猿とぞ笑ふなる四国の猿の子猿ぞわれは〉。子規は自分が田舎者であることをひそかに卑下していたが、その田舎者が日本の俳句と和歌を革新したぞという叫びたくなるような誇りを、この歌にこめている。子規は辞世をつくらなかったが、彼の三十五年の生涯を一首があらわしているようにも虚子にはおもえた。

私も、もはや子猿どころか老猿に近づいてきた。踊らにゃそんそん!!